

## (2) 中村氏一族と土屋氏

「小田原文庫刊行会・石橋山合戦前後」より

### ア 中村氏のおこりとその一党

酒匂川流域の足柄平野は、武士団の勃興とともに、自然の荒野がより一層開発される時期を迎えた。酒匂川の上流一帯には、藤原秀郷を遠祖とする波多野氏出身の河村・松田氏が、また下流には平良文を祖とする中村氏の一族子孫が、さらにその中流には藤原氏系の山内首藤氏の一族その他幾多の武士団が開発領主としてそれぞれの地域に蟠踞した。

治承4年(1180)8月23日頼朝の石橋山旗あげの際活躍した土肥次郎実平は、本来中村庄を本拠とする中村莊司宗平の子であるが、その子弥太郎遠平とともに土肥(現在の湯河原)から早川(現在の小田原市域)へと次第に勢力をのばしていた。また中村氏自身としても、庄官の任に甘んじているはずはなく、自ら鋤・鍬(すき・くわ)は持たぬとしても、盛んに自家の農園を開発していた。

「中村氏系図」によると、中村氏は桓武平姓より出ている。有名な平良文の第四代の孫常平(常陸笠間の押領使)の子の宗平が初めて中村郷に住んで、在名をもって中村氏となり、中村莊司宗平と名乗ったのが中村氏の元祖であった。

宗平の子に、世にあらわれた男子が4人あって、長男は太郎重平、次男は次郎実平、三男は三郎宗遠、四男は四郎友平といった。女子は2人あり、大住郡(今の平塚市)岡崎城主岡崎四郎義実(三浦氏出身)の妻となり、真田城主佐奈田(真田)与一義忠と土屋宗遠の養子土屋小次郎義清を生んだ桂御前、もう一人は満江御前といい、伊東祐親の妻となり曾我兄弟の父である河津三郎祐泰を生んだと言われている。

(土屋氏の系図(4)その2を参照)

この中村の男四兄弟のうち長男重平は、父の後を継いで中村郷に留まったが、病弱で比較的早く世を去り、その子景平も弟の盛平も石橋山合戦に名を連ねたが、その後あまり名が挙がらなかった。

次郎実平は、足柄下郡土肥郷に住んで、城を構えて土肥氏を名乗り、土肥次郎実平と称し、次第に名をあらわすのであった。実平の嫡男を弥太郎遠平といい、はじめ土肥弥太郎と称していたが、後年になって土肥郷の東隣の早川荘(小田原市)の地頭に任ぜられ、荘内の小早川村に城を築いて、ここに拠って小早川弥太郎と名乗るようになった。このようにして、土肥・小早川の両家が起きた。三郎宗遠は、大住郡土屋郷に住み土屋三郎と名乗って、土屋氏を起こした。四郎友平は、淘綾郡二宮郷に住んで二宮四郎と称し、二宮氏の祖先となった。

このようにして中村一党は、中村・土肥・土屋・二宮の四家、後に小早川氏を加え五家に分立した。いわゆる相模川以西の西相模の沿岸地帯に、一列雁行の姿で根拠を構えて経営に当たったので、頼朝の伊豆出現前に、すでに一党は相模国の新興武門として有名になっていた。

新しい力に燃えていた兄弟であり、その箱根山一つ越えと、すぐ伊豆の武家たちとも交渉が深いので、燃え出んとして強い風雪のために、いまだ芽を出し得ないで悩

んでいる新興勢力の主源頼朝に同情し、早くから心を寄せて、忍びて奉仕を続けていた人々であっただろう。

頼朝と心の結ばれた初めは、彼ら兄弟の父中村莊司宗平であるらしく、石橋山合戦後頼朝が宗平を重用し厚遇しているのでも、ほぼ察しられるところであるが、頼朝挙兵当時、宗平は相当の老齢に達していたので、彼は中村の郷を動かず、子供たちをして頼朝に尽忠させる態度をとっていた。しかも、重平は病を持って早世して、頼朝挙兵のときは、すでにこの世になかったので、孫の太郎景平と次郎盛平とを出陣させていた。

したがって、中村一党を率いて活動するのは、次男の土肥実平と三男の土屋宗遠であったから、両名の名が有名になり「土肥・土屋の党」と呼ばれるに至った。話は遡（さかのぼ）るが、12世紀の初頭、鎌倉にて勢力をふるっていた源義朝は、威勢に任せて近隣へ乱暴を働いたが、ある年相模国府の在庁官人と語り合って、約一千騎の軍兵をもって、大庭の御厨（みくりや）に侵入し、さんざんに荒らし廻って、都へ訴えられた。その中に三浦莊司や中村莊司の名が見えるが、この中村莊司は実平の父宗平の若き日の姿だったのかも知れない。

ところが、このときの敵味方が、源頼朝の石橋山の合戦の時と、ちょうど同じように敵味方に分れていた。頼朝を攻めた大庭景親や俣野五郎の与党は、頼朝の父義朝以来の恨みを晴らすつもりであったのだろう。

## イ 土屋氏のおこり

「ア・中村氏のおこりとその一党」でふれたとおり、土屋三郎宗遠は桓武平氏支流中村宗平の三男として大治3年(1128)に生まれた。宗遠が何才の時か不明であるが（おそらく中村家から分家した時と思われる）、ここ土屋郷に住みつき郷土となり在名をもって姓とした。

居館を天台宗大乘院にほど近い、南に面した段丘に設けた。宗遠ははじめ男子がなかったので、三浦悪四郎義実（岡崎四郎義実）を父とし、宗遠の姉（桂御前）を母とする岡崎小次郎義清（真田与一義忠の弟）を養子に迎えた。宗遠の実子である新三郎宗光、忠光及びその子孫らは、鎌倉幕府の中期から滅亡期に生きた武士であり、父宗遠・兄義清と共に重用された人物であったが、御家人の乱（和田合戦・元弘の乱等）に加わり、土屋家およびその領内に対立と動揺があったことは事実であった。

初代宗遠は、土屋郷に新しい文化と財産を残したことは否定できない。熊野神社・大乘院（天台宗）・芳盛寺（真言宗）などは、その代表的なものであり、新しい郷土（村）をつくり出した。また、谷間の多い山間部を開墾して、谷田（やとだ）を作ったことも見逃せない。

治承4年（1180）には頼朝の挙兵に馳せ参じ、石橋山以降幾多の業績を残し、建久3年（1192）鎌倉幕府開幕と同時に地頭職になり、御家人としての地位を高めていった。しかし、北条氏独裁が強化され、北条氏の惣領に仕える御家人（御身内）と宗遠のような御家人（外様）の対立が激化し、頼朝が世を去って10年後の承元元年（1209）5月28日に將軍家に不忠な者である梶原家茂（景時の孫）を刺し殺したのであった。この件は和田義盛の計らいで厚免となった。

もうひとつは、建暦3年（1213）和田合戦が起こった。時に宗遠85才であった。この敗戦により土屋一族は大打撃を受け（大学助義清討死）、幕府から名を現さなくなった。以上この二つは、不運にして宗遠の晩年における不始末であった。晩年故郷の土屋郷に土屋山阿弥陀寺（今の芳盛寺）を建立し、入道して空阿と号して老後の念仏三昧に入り、そして、ついに建保6年（1218）8月5日、90才にして「没したのであって、全盛から滅亡へと生きた一武将が目につかぶようである。（注1）

なお、土屋一族の墓は、天台宗大乘院の裏手（館跡の西側）に30余基の墓石が並んでおり、石橋山合戦・和田合戦（10名余の戦死）・平氏追討軍などに加わった宗遠はじめ宗光・忠光等とその一党が葬られている。（義清は鎌倉の寿福寺に葬られている）2代目宗光（左衛門尉）・3代目光時（将軍供奉兵員）は記録に残っているが、その後の名は不明である。

南北朝時代の元弘の乱の元弘3年（1333）には新田義貞方に、足利尊氏・基代が新田義興を討ったときの正平7年～13年（1352～1358）には足利氏にそれぞれ味方した。

1代目宗貞は、明德の乱の明德2年（1391）に山名方、応永の乱の応永6年（1399）に大内氏に味方し、大森氏を攻撃した。大内氏の敗退により土屋氏はその所領を没収された。

この頃、土屋氏は土肥氏とともに小田原城に拠っていたかどうか不明である。

応永23年（1416）には上杉禅秀の乱に加わり、上杉が敗れて大森氏が城主となり土肥・土屋氏時代は終わった。

しかし、両氏の子孫はこれで滅亡したのではなく、西相模の一角に土豪的勢力で永く保っていたらしい。こうした事情により、土屋地区には土屋姓がないものと思われる。現在は伊豆半島・長野・山梨方面に『土屋氏』が散見される。

現在土屋は、惣領分・庶子分・寺分と分かれているが、惣領分は惣領である宗光に、庶子分は養子の義清に、寺分は寺社領にそれぞれ分領されたところであるので、そのような名称で呼ばれたらしい。

（注1）土屋三郎宗遠の出生年は保安4年（1123）で、没年は建保元年（1213）という説もあります。

